
和真姐さまの着物屋ラジオ

鎌堂成久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和真姐さまの着物屋ラジオ

【Nコード】

N1184D

【作者名】

鎌堂成久

【あらすじ】

奇人変人動植物の知性体たちが繰り広げる、ファンタジー。

放射P 1

茶髪の少年が夏の平日の真昼、オフィス街を歩く、というのは異様な光景であることは間違いない。

「暑い……」

ビルのジャングル。コンクリートのかたまりの間を縫って歩くのは必要な移動をする大人たち。だが、その大人たちはある人に不埒な目を向ける。

制服を着て、どう見ても社会人に見えない少年がふらふらと歩く。少年が呟いた。

「変な人とかいないかなあ……？」

通りすがりの少年の言葉を聞いたサラリーマン2人組みは「不審」から「偏見」へと表情を変える。

「今の聞いたか？」

「ああ聞いた。あのこの方が変だよな」

「ていうか、あれはサボリ？ 不良？ 若すぎるボケ？」

「どちらかというと、全部だろ」

「やっぱりそうだよな……」

「「うーん……」」

健全な少年にするにはどうしたことかと2人は首を傾げてオフィスへと歩みを進めていった。

「やっぱり大人たちはまともだよな……」

またも通りすがりのOLは少年の言葉を聞いた。

（まともでないなら、ここにいないわよ。それよりもこの不良少年……。そうよ、おまわりさん！）

OLは走って近くの交番に駆け込んだ。走って約5秒。

「わかりました。すぐに事情聴取します。ありがとうございます！」
走りながら叫び、振り返った少年の手を掴んで交番へ引っ張り出す。

「な、なんすか！ 俺、なんかやった？」

引つ張られるまま少年は身を任せながらも、警官の意図をつかめぬまま、疑問を吹きかける。しかし、引つ張る側は問答無用。あつという間に交番の中だった。

「なんですか？」

「なんでこんな時間にこの辺をうろついているんだ？」

まずは目的から明かしていこうと思い、警官は意気込む。とはいえ、普通は名前から訊くだろう質問に少年は困惑の色を濃くしている。

「えっと、変な人を探しに来てたんです」

警官は続けざまに質問を重ねる。

「なんでこの時間なのかな、少年！ そしてお前の所持品を言ってみろ？」

「質問を二つも一気にしないで下さいよ」

「ああ！」

肯定の雄叫びは、顔を近づけて鼻息がかかるほど。近すぎる。

「この時間なのは、授業が楽しくなかったから抜け出しただけです」

しかし、少年は警官の大袈裟にも見える態度に迷惑そうにしながらもあまり驚いた様子もない。相当肝が据わっているのだろう。

「たったそれだけか？」

汗ばんでいる警官は拍子抜けして少し落ち着いていすに座る。

「そつすね。あとひとつ所持品ですっけ？ 怪しいのは持ってないので、それじゃ」

少年はニツコリ笑って立ち上がり出ていこうとした。それに警官は慌てて声をかけた。

「君、名前は？」

「びょーどーいん、けんすけ。平等院鳳凰堂の平等院に、絢爛の絢、喬木の喬。平等院絢喬でエス。じゃあね」

絢喬は颯爽と交番を出た。

(どこ行こうかな?)

やっぱりまた非難の目を向けられる。交番から出てきたのだから当然の如く以前よりもその視線は強さを増している。

「あ、ネコがいそうなトコ、みつけ!」

開き直る前に落ち込むことも無く、回りの様子も気にせず、交番の隣の路地を見つけて、ずかずかと踏み込んでいく。

「へへん。ネコちゃんいるかな?」

景色が、硬質な灰色の世界から一転。薄暗い陰鬱な空気が流れ始めた。

――!

一歩一歩先へ進むうちに驚愕に陥る。

「仁王様っ! ひゃふん」

暗くてあまりにも色の判別の難しい路地に巨大な仁王がまさしく仁王立ちで立つ。

「俺、なんか悪いことしましたか? 仁王様あっお許しを……」

仁王は表情を変えず、動きもしない。

「えっと、あ、アレ?」

立体的ではあるが立体ではないようだ。まるで絵のようだ。

「仁王様、笑ってください!」

と、ありえないことを絢喬は発言する。そして仁王の足へすがり付こうと這いずるが壁へと当たった。

「ということとは、絵?」

繊細なグラフィティアートだった。壁に描かれた仁王は同化するように描かれたようだ。まるでだれにも見られないように。しかし、それでも壮大な仁王像は絢喬を見下ろし、訪問者に威圧を与える。

「な、なんだ」

そう思って、胸をなでおろす。

「そっか。ここの守り神なわけね――よろしく、仁王様」

強い形相で訪問者を睨み、この先にある何かを守る。とはいえ、

この先に何があるというのか。ただの道としか見えないのだが。

特徴というと、人の顔に見えるだろうひび割れが、足元を這い回るねずみたちが、光を遮る壁たちが、やはりこちらも訪問者を見続ける。それらはこの場の雰囲気を完全に気味が悪い空間としてビル街の中に確かに存在しているようだった。

「そうそう、ネコだ！ ネコを探しにきたんだよね」

絢喬は物怖じもせず歩みを進めた。人の通りもあるらしく、空き缶などもコロコロと音を立ててはころがる。中には、猥らな行いでもしたのか女性モノの下着さえ落ちている。様子からするとかなり荒れているのか。

道は建物と建物の間が切れたと同じに分かれていく。先に続く道、右へ左へまさかこんなにもビルが密集しているとは……と驚いてしまふ。

絢喬は「ネコのためのテーマソング」を歌い始める。

「さあ、ネコちゃん出でよ!!」

最初に絶対付けるセリフはネコを崇めたつもりである。

作詞・曲ノ平等院 絢喬

にゃーお ねこ にゃーお ねこ

今日もぼくと にゃーお

にゃんにゃんにゃん にゃーお

逃げないで にゃーお

にゃんにゃんにゃん にゃーお

おいしそうな毛と にゃーお

きれいなひとみと にゃーお

にゃーお ねこ にゃーお ねこ

今日も 一緒に

にゃんにゃんにゃん にゃんにゃんにゃん

にゃーお にゃーお にゃん

歌っているといつの間にか、開けた場所があるのか光が射している。

「向こうにネコが日向ぼっこを！」

と勝手な思い込みとつさの勘で絢喬は走り出した。足元には水溜りがあるらしく制服のズボンに水が撥ねていく。しかし当人は構わず、ただネコに出逢うために走り続ける。

「ネコ——！！！」

広場が見える。荒野のオアシスの如く、言うならばコンクリートのオアシスというところ。

広場に入る一歩手前で絢喬は止まった。

「あ！ ネコの城——！」

と言うように何十匹ものネコが塊を成して蠢いている。

「まずは観てなきゃ。ネコちゃんをビックリさせたら逃げちゃうからね……」

絢喬はそつとネコのかたまりの動向を見守る。

「ネコ、ネコ、俺の元へ！」

チャンツのようにリズムに乗って遊ぶ。

ネコのかたまりはぞろぞろと蠢く。ふと見えた、金の輝き。

「あ、あれは金のネコ！ 幻じゃないよね？」

その蠢く塊の中から女の姿が見えた。

絶世の美女と言っても過言ではなからう、おネエ系の着物美女。

それと、その腕には光り輝く金のネコ。

絢喬は気付く。これは全部飼いネコのよう。だが、手入れの行き届いた金のネコは拝見したいところ。

「うう……！！」

手も出せないから呻くだけ。

「お姐さま、ネコ、PLEASE ME イイイイ——！」

叫んだ瞬間、女と金のネコは忽然と姿を消していた。

放射P2

『なあ、和真』

世界で最も美しい金のネコ。それは喋るのだ。

腕の中のネコはそれを抱える美女に声をかけ、美女はそれに応じ、
「なあに？」と首を傾げる。

『さっきの広場、男いたよな？ 最後になんか叫んでたような気がするんだけど』

和真なる美女は一拍置いて、笑った。

「浮浪者じゃないかしら？ 荒れてたじゃない」

『うん、まあそうだけど』

金のネコ、京太郎は唸った。

『俺、見られてた？』

「あんたがねらわれたら世界中で天変地異が起きるわよ」

京太郎の言葉がつまる。なぜなら、和真の言うとおりだからだ。

京太郎は、いわゆる“普通”ではない。ネコであるのは間違いないが、人間にも擬態できる。別世界の生き物なのだ。

『だ、だよな。まさか人間に俺の姿は見えないもんな』

京太郎はほんの少し恐怖に苛まれる。

「でも、なぜあの浮浪者はあんなところにいたのかしら？ 壁を突き抜けなきゃ、向こうには来られないのよ？」

『もしかして、“異常者”だったり！ っていうか、あの人、俺が見たときはどつかの高校生だよ。制服着てたし、目エ丸くしてビツクリしてたし』

「びつくりするのはあたりまえよ。いきなり人が消えるんだから」
『じゃないったら！ 俺を見てたんだってば』

京太郎は必死に自分の言葉を通す。とは言え、絶世の美女、和真は言った。

「違うわよ。この私の胸を見ていたのよ！」

京太郎の心は固まった。氷のように冷え切って。風邪を引きそうな言葉だ。自分をそのように言い切れるなんて、トんだ人だ。

『いい。俺、帰る』

（こんな人間とは付き合っていない。今日は特に。特別なのは和真だけではないんだよ。奇絶界と更新できたニンゲンは昔からたくさんいた）

京太郎は、和真にしか見えないはずのネコの姿で和真を睨んだ。場所はまだ路地。今ならニンゲンの姿に擬態できる。

が、和真が走り出した。

『あ、俺は帰る！』

だが、言い終わった一瞬で人通りの多い道に出た。ビル街の間に突如として現れた都心の主要道路。

一瞬の沈黙が訪れたとき、車たちが自己主張するようにクラクシヨンや改造マフラーが叫び声を上げた。

『和真、あんたワザトだよな……』

結局、京太郎は和真から逃れることは出来ないのだった。

『なあ、せめて擬態させてくれ。でなきゃ、あんたとしゃべれない。なあ、聴いてる？』

5分後、京太郎はいまだ和真の腕の中だった。

無視も大概にしるよ！

と言いたいところだが、京太郎は言えない。言ったら下ろされて人にぶつかる危険が迫ってくるのだ。ニンゲンという生き物は、目で見ることの危険しか回避しない。下にいる“見えない”ネコなんて、蹴り飛ばされて、怪我をしてしまう。和真に抱えられるというのはただ楽をするためではなく、京太郎にとっては立派な自己防衛なのだ。

『じゃあさ、公衆便所のある公園によってよ！ 擬態するから』

微妙に頷いたようだ。道路の標識を確認する動作をして、和真が呟いた。

「遠回りになるわね。ま、いいか」

どうやら願いは聞き入れてもらえたらしい。
和真の歩みが、大きく速くなった。

放射P3

「ちえゝ、消えたや。っていつかなんで消えたんだろ。マジック？」
昼間、サボった高校生は突如消えた美女と金のネコのことを考えた。

すっかり言葉として呟くものだから、商店街を道行く人は通り過ぎた瞬間、顔をしかめる。まれに哀れむような目を向けるものもあるが、絢喬はまるで気付かないのだった。

「イリュ——ジョンッ！」

とうとう、くると回って両手を広げるといふ、はた迷惑な行動にまで出る。見た目、高校を中退したばかりの大道芸人か。

「やつぱりきえないよなあ。どうにか、あのネコに会いたいなあ」
いきなり消えたものの跡は追えない。

「いつものトコに行きますか！」

早足で商店街への入り口の小さな駐輪場へ行った。

緑と自然の公園、その一步手前の横断歩道で絢喬は信号待ちをしていた。

「ヨーレヨーレヤッヒーホー！ ヤッヒーホーレー、ヤッヒーホー！
ヨーレヨーレヤッヒホーレ、ヤッヒーホーレー、ヤー！」

小さな声で、これから訪ねていく相手が好きな曲を口ずさむ。
隣に立っていた小学生が、

「ハ。ジだあ。今ごろダッセえ」

と言った。その友達の読。ジャイアンツの帽子をかぶった子が、
「だよなあ」と生意気を抜かす。

絢喬は驚き、文部省唱歌の「海」を歌いだす。対抗策だと思った
のだがそうでもない。

「なんか、幼稚園児向けの曲、歌ってやんの。キーモー」

青信号になり、2人の小学生は勢いよく公園へ向かっていった。

絢喬は少しの間呆然とし、信号が点滅する前にペダルを漕ぎ出した。

そして渡り終えたとき、1人の着物の女性がそばを通り過ぎる。

「あつ」

絢喬は小さく声を漏らした。女は、あのコンクリートのオアシスなる広場にいた者に酷似している。

「あれ、でもネコは……？」

どうやら、女の足元にくつついて歩いているネコには気付かないネコの行方を探るために女に近づいていこうとする。

女は公衆トイレへ向かっているらしい。このままだといっているのだが。

絢喬は仕方ない、と木の陰で自転車から降りて動向を見守る。

瞬間、女の足元の金のネコが男子トイレへ駆け込んでいく。

「き、金のネコ！」

少し大きめに叫んでしまったが、幸いにも周りに人はいなかった。女は何食わぬ顔で巾着から文庫本を取り出すと、読み始めた。少しして、何か思いついたように頷く。そしてトイレから出てきた男が女に近づいていく。ボーイッシュな背の高い男だ。かなりの美形のようなだが、女を見ては情けない顔をする。

「なんだよ、あの女。金のネコは何処に行かせたんだ？ もしや、先に家に帰らせたんだな！」

絢喬は勝手に考えをめぐらせ、女を家までつけることにする。

「——ケーくん！」

いきなり背後から声をかけられた。振り向くと満面の笑みで巻き髪少女が立っている。ちょうど絢喬と同じくらいの歳に見える。

「キキちゃん、どうしてわかったんだよ？」

変人仲間の再会だ。樹記はフツと笑う。

「アタシの縄張りに入ってたんだから、アタシが気付かないわけないやない。アタシのエシユロンは最強なんじゃ」

そう、樹記は公共公園にセンサーをめぐらせてしまった、機械オタク、らしい。それにしても極普通の女子高生だ。とてもブレザー

が似合い、優等生にも見える。胸の校章からは絢喬が通う学校の生徒であることは間違いない。

「そっか！ さっすがキキちゃんだ」

樹記は胸を張って「えっへん」「おっほん」を連発している。絢喬が何かを思いついたようで口を開いた。

「ね、キキちゃん。さっき金色のネコがいたと思うんだけど、まだいる？」

エシユロンだ。なんでもわかるはずだ。それにこれまで一度も樹記の機械が誤作動を起こしたことはない。樹記こそ、天才なのだ。

「いた、というのが正しいかもしれないよ。最初はちっさいのが見えないくらいに光ってたらしいのだがね。でね、ソイツが普通の成人男性くらいの大きさになってどつかのおんなどあるいていつちやったわけよ。ちなみに現場はすぐそこなんよお。君が見てたところじゃ！」

樹記が、指差すその先は、公衆トイレだ。

「うっそ！ じゃああれがネコちゃん？！」

絢喬が頭にまで響くのではないかと思われるほど大きな声を出す。至近距離にいる樹記が耳を塞ぎながら、「そういうことになるんやで」と言った。

「じゃ、じゃあ追いかけなきゃ！」

絢喬が自転車に飛び乗ると、荷物置きに樹記がブレザーのスカートを丁寧な叩いて横乗りする。

「そうだなあ、デパートに向かったと思うから、そっちに飛ばしてみい」

樹記は常時入ってくるエシユロンの情報から着物女と金のネコだった男の状況を拾い上げてゆく。

「おっけー！ つかまってて、樹記」

「あ、非常勤がベンチにすわってるう！」

樹記の無駄な発言に目もくれず、ただママチャリを飛ばす。

「そろそろ無職なんですよ、アノ人」

「あつはは、かもなのお」

変人2人は世の残酷さを嘲笑する。風が言葉を飲み込んだ。

「ねー、ケンくん。あの二人って付き合ってたのかね、なの？」

「そーかな？ 奴隷に見えるよ、ネコだった方が」

着物女とネコ男を追跡している二人は、勝手に違憲を言い始めた。奴隷と言うのはさすがに関係としてはないだろうが、男の方はどうも不機嫌そうな中にも情けないというような表情を浮かべている。

「なんなのさー、あいつらくんめ！」

絢喬が人波を自転車を押して歩いているというのに、樹記は荷物置きにすわって叫んでいる。

「まあ、俺の目的は金のネコの居場所だから、特にはどうでもイんだけどね」

変人としては、一部合っていて、一部そぐわない発言をしている絢喬に樹記が教師のように諭し始める。

「あのですね、平等院絢喬くん？ 人と言うものは関係が連鎖してこそ出来る存在なのです。例えばですよ、絢喬くんが独りぼっちでこれまでの一人の人ともあったことがないとします。言葉は使えますか？ 使えませんね。では次に、アタクシ、キキとあなたの関係はいつのまにかの恋人ですね。そして関係が出来る。樹記の友達の子ってね。繋がるの。いつか遠いどこかであなたとあのネコは繋がっているのかもしれないよ。ってことは、ロマンスよ！
ロマンスなのじゃ！」

叫ぶ樹記を傍らに絢喬は少し考えた。コレはどうも非現実だ、とネコが人間に変わるなんてどうも非現実、フィクションだ。

「うん、うん、ロマンスか……っーかいつの間にかカップルなんだ。それも別にいいんだけど。でもキキちゃん、言っとく。俺は変モノラブ同盟を組んでるつもりだから」 絢喬の「同盟の仲」発言に、
「え？」

と樹記が目丸くした。

「そ、そうだったの」

「まあ、そういうこと。イイ男の子はたくさんいるから！」

絢喬が樹記の背中を軽く叩いた。

「うむ……ありがとさ」

樹記はツーンとすまして、「アタシの恋人はコイルだもんっ」と吐き捨てた。半ば危険な発言に絢喬はデパートのビルの谷間の喧騒で聞くことが出来なかった。

「キキ、なんか言った？」

「なーんにも」

放射P4

「あの、和真？ あんた、どこに行くんですか」

「デパートに決まってるでしょ」

振り向きもせず美女は人の波をぬって歩いてゆく。

「は？」

返ってきた答えはどうも元から決定していたようで、京太郎へと鋭い声が飛ぶ。どうしてデパートに行くのか、心当たりもないのに。

「は？ って。理解力のないネコね。あんたそれでも男なの？」

京太郎は心の中で呟く、「いや唐突過ぎだって。どうしたってデパートなんかに」と。

「あんたに言われたくねえよ。長寿ババア」

「よく言ったわね。この若造ネコには、バツとして荷物持ちだわ。」

——ま、最初からやらせるつもりだったけど」

あまりにも希薄なテンションで、DS女の言葉を吐き捨てる和真は京太郎にとって永遠の不思議だ。

「って、やらせるつもりだったって……デパートに行く目的は俺に荷物もちをさせるつもりだったのか！ 買い物なんて聞いてねえよ。木戸のそこに行くだけだって——」

「下僕にそんなことはいわなくていいじゃない。それに美女が重い荷物を持っていたら、あんただって手伝うでしょ？ それなら最初から下僕を使うべきよ。その前に絵にならないって言う問題の解消のためなんだけど」

京太郎の言葉を遮った和真はつらつらと非常な言葉を並べていく。
「あー。下僕は辛いよ、苦しいよ。なあ、おかっさん、俺は悪魔に囚われてしまったらいいよ。誰もこの俺を助けてくれる仲間なんていないんだよ」

と半泣きで京太郎は嘆く。

「うんうん、あんたの親は世界中のどこを捜したっていやしないわ

よ。どうせ創られた存在なんだし」

「酷い……」

とうとうネコ男、京太郎は落ち込んでしまふ。和真が首を掴んでひっぱると「にゃ！」と顔に似合わない声を出してうなだれてしまった。

「さて、買い物よ」

和真は企みを隠した笑みで、大きなデパートへと入っていった。

「うっわ、俺、どうしたらいいの？」

京太郎は自問した。和真は隣で誇らしげに笑っている。

「あおう、お客様、配達なさいますか？ 有料ですが」

店員は丁寧に、また戸惑い気遣いながら不思議そうにたずねてくる。

「ああ、心配しないで。コイツ軟だけど、力には自信があるんだそうよ。これくらい軽いわ」

「そうですか。お氣をつけてください」

とは言ったものの店員は、「本当にいいのかしら？ こんな重いものを持って……つぶれそうよ」と思ってしまう。

「お氣遣いありがとね、おねえさん……」

やつれたような今日太郎の苦い微笑みを見て、店員は胸を射られた。

（な、カツコイイ……！）

と思ったときには、京太郎は荷を担いで店の外で苦痛の表情を浮かべていた。

店員は呆けたまま、2人の影が人波に飲まれるのを見つめていた。

「おい、田中あ！」

チーフが店員を呼ぶ。

放射P5

「遅いわ。姐さん方は一体……何かの事件にでも逢われたなどではっ！」

「なーわけないよ、木戸孝允」

「私の名前が、歴史上の人物に酷似していたつもりはないんだけど」
「へーへー。すんませんね、木戸」

高層ビルの立ち並ぶ場所の喧騒がきこえなくなった夕暮れの郊外の住宅地。

手入れの行き届いた庭で、主婦のような格好のまだまだ幼さを残す女とそれよりも少しばかり下の年齢に見える少年が常緑樹の落葉を拾っていた。戯言も次第に内容が薄くなってきた。

待ち人は何故だか到着予定時刻を、三時間強遅れてさえも現れない。

「でさあ、この頃どーして“門”を開けようとしなの？」

「そんなに荒廃したあちらに帰りたいのかしらね、七草」

「いや、いつのまにか、ポンツで治ってないかなーなんてね。ありえるわけないよね」

「あちらは超自然よ。天変地異が起きたって今の状況はひっくり返せないしね。というか、もっと混乱するかもね」

「そりゃあみなさんでどーにか出来たもんでないしな。協力してくれる異常者さえいれば、どうにかなるのかも」

「でも、協力者といっても、強い力を持っててなくちゃ、場合によつては悲惨な事態を招くわ」

と2人の故郷は最近、大変な危機的状況に陥っている。都会へ出てきた田舎者はその故郷を、救いたいのだが、無理という現実。これだけは、戯言でなく真剣な問題だった。

ふとして、木戸が顔を門へ向けた。

「七草、門へお出迎えに行くよ」

「え？ あ、ああ。来た、っぱいね、京太郎——和真姐さん！」

「あら？ 声、聴こえた？ 七草が私を呼んでいるわよ」

「ああ？ うるさい、和真。頭に響く」

「二日酔い？」

「脱水症状に決まってる」

「どーして——」

木戸家近く。七草の呼び声に気付いた和真は京太郎に計らうこともなく、歩調を速める。

「姐さん！」

「かーずーまーさん！」

門の外にまででてきて、木戸と七草が手を振っている。ふと木戸は思ってしまった。

（あれは京よね？ どうしたことが、とてもやつれているようで……というか、なにアレ。なんか憑いてないっ？！）

という、「憑いているもの」はどうも人らしい。その後ろには付いている人までいる。一体何があったのか——これこそ、まさに事件なのかもしれない。

京太郎のやつれ具合を認めて少しばかり腹を抱えていた七草もこの変な様子に気が付いてあ然としている。

「遅くなってすまないわね、木戸」

京太郎を残してすたすたと歩いてきた和真が門の前で軽くあいさつする。

木戸は恐縮そうに頭をたれる。

「いえ、お呼びしたのはこちらです。わざわざ足を運んでくださいますしてありがとうございます——」

「京オ？」

七草が心配した足取りで京太郎に近づいていく。

「どうしたんだよ、京太郎」

「ああ？ 久しぶりだな、七草。どうした？」

と質問にまるで答えているようにも見えない京太郎の両手の荷物を持ってあげる。

（んー。また大きなマネキン背負ってるなあ。今度は男物でも売り出すのかな？　つーか、制服着てるし、妙にリアルだよ、コレ）
考えつつも、適当な答えで京太郎に返すことにする。

「どうもしてないよ。ささ、まずは上がれよ。姐さんのおかげで疲れきってんだろ」

「うむ。」

「おすぞー」七草が京太郎の後ろへまわり、その背を荷物と一緒に押していく。「でけえな、このマネキン」

そして門を開けようと再び七草が京太郎の前へ出て行く。それから、ぞろぞろと和真、木戸、京太郎の順へ門の内側へと入ってゆく。

——ふと、鈍い音が京太郎の後ろで響いた。

「ゴドツ……？」

戸を押さえていた七草が京太郎を退けると、

「マネキンが落ちたんだ」

音を聞いた二人も寄ってきた。

「なんだ。びつくりした」と、木戸。

「ずいぶん大きな人形ね」と、和真。

京太郎は振り向く気力もないらしく、重い足取りで玄関へ向かう。美形がとてもやつれてしまっている。長身も何か腰が曲がって辛そうだ。

「あ、じゃあコレは俺が運ぶから」

年上の二人を気遣って七草が言った。

「じゃあ、よろしく七草」

和真は関係ないともいうように京太郎へ続く。木戸もさっさと中へ入っていく。

「よいしょつ、と」

七草が制服の人形らしきものを持ち上げる。
と、その時、

「スウ――」

「は？」

人形から出たその音に顔をしかめる。

「スウ――」

「……もしかして、人間かな、コレ」

寝ている、ぐっすりと。どうも見ない顔だが、和真の新顔か？
などなど、少年の正体を考えていく。

「どーしょ」

既に担いでしまった。また置石に横たわるのも、この少年に対して失礼だ。

「しかたねえよなあ。しゃあ、生きてる人間ほど重いもんはないけど、こいつも客人だしな」

そのまま少年をかつぎ、七草は玄関をくぐった。

放射 P 6

「あのー京太郎？」

「ん、ああ？」

七草は客間に入ると、思わず京太郎に声をかけていた。

「お前が背負ってたのはニンゲンでない？」

「俺、ヒトを持ってた覚えなんてないけど。なんなの？」

「覚えてないって……あの男子高校生を背負ってたのを？」

「ていうか、何それ？」

普段ならボケることのない京太郎が本当に困惑して、七草を見た。

「本当に知らないのか？」

「うん、知らねえよ」

「マジ?!」

「マジ」

七草は諦めて、京太郎の細い手首を掴んだ。

「じゃあ、ちよつと来い」

「い、いいけど」

京太郎も行く意思を示したが、ほとんど引きずられた状態で、床を這っている。表情も引きずられる苦痛に歪められている。

「ひ、ひきずんなよ!」

「うるさい、”ちゃん”!」

「あ、テメエ、なんで俺の本当の名前知ってんだよ」

「べつつにイ」

まだまだ引きずられていた。だが、それも七草の部屋でとまっていた。

「なに、連れ込んだんだ？」

「冗談ゆうなっ!」

七草はガラガラと和室の扉を横にひく。

そして――、

「スウ――」

中ではのんびりとした空気が流れているようだ。少年が気を失ってからは、どうも爆睡を続けているらしい。

「で？」

「お前が連れてきた客人だよ」

「俺が連れてきた？ 本当に？ もしかして和真がいつの間にか載せていたのか？」

京太郎は憤慨して、指を噛んでいる。どうも癖らしいが、時々血を流しているのを見ると七草は「一種の精神病だよ」と自分に言い聞かせている。そしてその癖を治すには、

「ニヤー！！ 首、首、くつび―― イイイイ！！」

首をつかむのだ。京太郎の弱点はそこである。

「な、な、何をする――！！」

口調まで変わるのだから相当のショックに違いない。

「でもって、姐さんに訊いてみたほうがいいかもしれないな」

七草は一人納得して、部屋を出た。が、京太郎を俯いているのを見て、

「さつさと来い」

またも首根っこを掴んだ。そして、京太郎は巨大な廊下を轟かし絶叫した。

「どうしたのかしら、七草」

「姐さん、ちよつと来てください」

と早速本題に入るべく、2人は客間にいた。

目の前には「着物」の美女と「エプロン」少女だ。が、何故かの2人が一緒にいても違和感がしないのがとても不思議だ。

「七草、今はとても大切な話の途中よ」

木戸が口を挟む。

「そうね、どれくらいで終わるの？」

和真はそれを無視して話を進める。

「たぶん……、直ぐ」

京太郎が即座に答えた。

「案内しなさい、京」

「和真さ、」

木戸は途中で口を閉ざし、渋った顔で腰を上げた。

「七草、あんたあの異常者を協力者にしないといけないのに。どうしてこんなときに邪魔をするのよ。今じゃなきゃだめなの？」

「んー、そうでもない。まあ、行ってみりゃわかるさ」

木戸が「つて、あんたは」と吐き捨てた。

「なによ、京太郎。七草の部屋？」

和真が自嘲気味に笑った。

「あれ、あの子だよ。あんた、誘拐でもしたの？ それともあーいう趣味？」

訊いてみるが和真は横たわる少年を見下ろしたままだ。

「スウ——」

少年の規則正しい呼吸が安穩な空間へと仕立てている。

「さっきの、マネキンじゃないのね。あんたが気を利かせて買ってくれたと思ったら……このダメネコ。私の家での許容人数は既に上限値に達しているわ」

まるで京太郎が玩具を拾ってきたかのような物言い。

「あんた、知らないのか？」

「知るわけがないわ。私の細腕でこんなに健康な少年を持てるわけもないじゃない」

和真は完全否定だ、結果的に。

じゃあ、この少年は一体？ となるが、この場にいる京太郎、和真、木戸、七草の4人には心当たりが全くない。

「起こす？」という目配せで七草が一人ひとりに確認する。全員一致で頷く。

「んじゃ、イかせてもらいまっす——！」

京太郎の瞳に鋭い光が走る。空手のように構えをすると、

「グ——テンタークツ!!」

という掛け声とともに、肘が少年のみぞおち辺りに入る。

木戸と七草がその光景に目をみはる。対して和真は無表情で様子を見て、事を起こした京太郎は肘をさすっている。

「グフツ」

少年から息が漏れるが、かえって気絶したのか一向に起きる様子が見られない。

「七草っ」と京太郎が呼びかける。「コイツ腹硬すぎだよ！何で鍛えてんの？」と、少年本人に聞くべきであろう言葉を七草へと問う。

「知るかよ」

と七草はつぶやき、京太郎の首を掴み外に連れ出す。相も変わらず京太郎は絶叫し、七草に説教される近未来も考えられないのだった。

「おお、えらいは、七草」

和真が手を叩き、2人の背中を見送る。

そして、振り返ると混乱する木戸を見る。

「和真さん、あの少年は何者ですか？」

「——ひとつ訊くわ」

和真は木戸の言葉をひとつとも耳に入れていなかった。木戸がうなだれるも「はい、なんでしょう？」と返す。

「この家って敷地内は、すべて結界の領域だったわよね」

「はい。私の力で“門”を護っておりますので」

「そう……」しばらく和真が手を組み目を閉じる。どうやら考えているらしい。一分ほど部屋で優雅に立ち尽くして、突然目を見開いた。

「な。どうしたんですか？」

「この子、私と同類かもしれないわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1184d/>

和真姐さまの着物屋ラジオ

2010年10月9日22時01分発行